

土木関係の技術者でいわゆる技術以外で活躍された方々も多く、それぞれにりっぱな業績をあげておられるが、なかでも神戸市長を勤められた原口さんが、在職中に打ち出された開発の大構想などは、さすがに土木技術者らしく雄大なもので、かねてから大いに敬服していた。

ところがこの4月に、はからずも私自身が北海道知事に就任することになり、土木技術畑出身の知事として、諸先輩に負けたくない、りっぱな郷土づくりをしたいものと、ひそかに心に期しているところである。

私が北大の土木を出たのは昭和13年のことであるから、早いものでもう30年余になる。しかし、技術者本来としての深みにおいては、残念ながらまだ不十分であると考えている。ふり返ってみても、これといって取りたてていべき業績もないのであるが、ただ非常に範囲が広く、いろいろな仕事をさせていただいたことには、心から感謝している。

道路はもちろん、河川・港湾・ダムそれに土地改良まで何でもひととおりのことは経験したし、現場監督も随分やらされた。それに、経済安定本部（現在の経済企画庁）や北海道開発庁にも勤務したので、経済長期計画や地域開発計画の策定、予算折衝事務など、一般行政事務も経験させていただいたことは、現職になってみて大いに役立ち、また開発途上にある北海道の行政をすすめるうえで、土木技術者としての経験がまことに貴重だったと思っている。

しかし、今回の知事選挙に際しては、「土木の専門家で、一般行政はわからない」とか「技術者は人間的に幅が狭い」とか「頑固で官僚的」とかいう、いろいろな批判を受けた。もちろん、これは私個人に対するものでもあろうが、世間一般の技術者に対する一種の偏見がその底にあるようだ。つまり、世間では技術者といえ、自分の専門分野しか知らない、頑迷で融通のきかない人間ときめつけてしまう傾向があるように思える。

しかしながら、現代のように社会が複雑になってくると、エキスパートとしての技術者の存在はもちろん、また、別な面での技術者も必要なのではあるまいか。まして、行政あるいは管理的立場にある技術者の場合は、なおさら幅広い視野でものごとを見、判断をくだすことのできる人材の必要性が要求されていると思われる。

たとえば道路一本つくるにしても、経済効果はもちろんのこと、自然や都市環境との調和とか、住民生活のかかわり合いなど、産業や生活行政全般の立場からの検

討が要求されるわけであるから、ここで技術者の幅広さが必要となってくる。

ただ、一面ではやはり旧来の習慣から抜けきれず、さらに、役人的なセクト主義もわざわざして、総合的行政を困難にしている面も少なくないことは事実である。

私は、この際、従来からの縦割りの機構をもう一度検討し直してみてもどうかと考えている。たとえば、地方行政組織において都市政策なら都市に関する仕事を総合的に実施する都市開発部といった機構を設け、このなかに土木や建築の技術部門も含めてしまうというやり方である。こういう方式でゆけば、あるいは産業行政についても、生産面だけでなく生活を含めた総合性をはかることなども考えられるのではないだろうか。これには当然中央庁の縦割りも改めてもらうことが必要であり、いますぐには実現が困難かもしれないが、本当に、住民の要求にこたえる行政をすすめてゆくためには、そこまで踏み切らなければならない時代にきているのではないかと考えている。

ともあれ、選挙を通じて受けた批判はそれなりに私自身謙虚に反省をしているが、技術者が、えてしてこうした偏見でみられることについては、お互いにいっそう注意をしてゆきたいものだと思う。

また、技術に関連して思うことは、最近の公害に対する一般のヒステリックともいえる反応ぶりである。たしかに、いままでは公害に対して十分な配慮が足りなかったと思うし、もちろん人間尊重・生活優先があらゆるものの基本であるから、公害は徹底的に排除しなければならないことは当然であるとも考えている。

しかし、十分な調査と防止対策を講ずることにより、生産活動そのものを中止する必要はないと私は思う。話し合いも何もしないうちに、先手をとって何でも反対と叫ばれ、それがあたかも世論であるかのごとくいわれることは、まことに遺憾なことであり、科学とか技術に対する不信感の現われといっても過言ではあるまい。

生活をより豊かにするためには、生産活動をいっそう活発にしなければならない。しかし、そうすればただちに「産業優先はけしからん」というお叱りをこうむることになる。

開発の面からみて、今後の産業発展に大きな期待が寄せられている北海道の現状を考えると、この問題はまことに重大なことといわなければならない。

一人の技術者として、生産と生活の接点とは何であろうかと、しみじみ考えさせられる昨今である。

\* 正会員 北海道知事